呼気NO測定によりアトピー咳嗽と咳喘息の鑑別は可能か？

白井敏博[1]，美甘真史[1]，森　和貴[1]，池田政輝[1]，宍戸雄一郎[1]，秋田剛史[1]，森田　悟[1]，
朝田和博[1]，須田隆文[2]，千田金吾[2]
静岡県立総合病院呼吸器内科[1]，浜松医科大学呼吸器内科[2]

【背景と目的】アトピー咳嗽と咳喘息の鑑別は気管支拡張薬に対する反応性によりなされるがしばしば困難なことがある。一方，日常診療における呼気NO測定の有用性は喘息では確立され，今後さらに普及する可能性が高い。そこで今回，アトピー咳嗽と咳喘息の鑑別における呼気NO測定の有用性について検討を加えた。

【対象と方法】対象は2005年4月から現在までに当院を受診し，咳嗽に関するガイドラインの簡易診断基準に基づいて診断したアトピー咳嗽患者10例（男性6例，女性4例，年齢中央値：46（31-71）歳）と咳喘息患者15例（男性10例，女性5例，年齢中央値：45（19-67）歳）。患者背景，肺機能，呼気中NO濃度などの項目について2群間で比較した。

【結果】呼気中NO濃度の中央値は，アトピー咳嗽群26.7 ppb，咳喘息群34.3 ppbであり有意差はなかった。しかし，%MMFはアトピー咳嗽群112.3%，咳喘息群92.4%と有意差（p=0.0359）を認めた。ROC解析では，%MMFはAUC ＝ 0.771で呼気中NO濃度よりも優れ，cut off 値98.5%で感度87.5%，特異度73.3%であった。

【考察】呼気中NO濃度よりもフローボリューム曲線により2疾患の鑑別が可能であることが示唆された。